

旅学 / A-Works

GET YOUR KIDS ON ROOT66!



DJ GEORGE TRIPS THE STATES!

Text & photographs by George Cockle

一人で走ろうと思った。ルート66を一日中ドライブして、毎晩どこかの小さな村でモーターに泊まり、ダイナーに入って、化粧が濃すぎて金髪すぎるウェイトレスと話しながら、ハンバーガーを食べ、まずくて薄いコーヒーを飲みたかった。その後はバーでジューク・ボックスに金を入れ、ビールを飲みながら音楽を聴いて、そこにいるローカルのアメリカ人と話をして、男の一人旅を味わおうと思った。

そんな空想を巡らせていたある日。5歳になる息子、ブルーがこう言った。

「一緒に行く」

理由はただ一つ、「僕もアメリカ人だから」。

人生は旅だ。

人は生まれた時からこの世を去るまで旅を続ける。目的はどこにあるんだろう。



俺は今までさまざまな仕事をしながら旅してきた。そんな旅も折り返し地点を過ぎ44歳のとき、友達から面白い仕事の話がきた。ラジオDJのオーディションに参加しないかという話だった。今まであまり考えたことがない仕事だったから、軽い気持ちでオーディションに行ってみた。

しかしながら、その数は4回に及んだ。きっとラジオで話した経験があまりない俺のことを不安に思ったのだろう。でも最終的に受かってしまった。Ha!

初めてみると、これが自分はかなり向いていることがすぐわかり、すごく延しかった。それまでやっていた音楽関係の仕事を捨てて、すべてをラジオに賭けた。

やがて俺は50歳になり、人生の未来がすごく明るく見えていた……そう思ったのも束の間、突然番組がキャンセル。50歳、やっと見つけた愛する仕事がなくなって…

リセットしたい気持ちを抱え、旅に出ようと思った。19歳で大学を辞め、人生の道が分からなくなったあの頃と同じように、旅に出ようと考え始めた。

ルート66は、東の町シカゴと海岸にあるロサンゼルスを結ぶ。かつては東から西に荷物を運ぶためのだったが、すぐにそれは荷物だけじゃなく、人も道になった。アメリカ人にとっては夢のハイウェイだ。

ジョン・スタインベックの「怒りのぶどう」もこのハイウェイを舞台にした小説だし、映画「イージーライダー」もルート66を舞台にしている。ボビー・トゥループの名曲「ルート66」に出てくる歌詞も、東から西へ向かって街の名前を挙げている。

イリノイ州のシカゴからミズーリ、カンザス。オクラホマ、テキサス、ニューメキシコ、アリゾナ、そして最後にカリフォルニア。俺の家族の中では、ルート66を旅することが一つ重要なライト・オヴ・パッセージだ。俺の親父も祖父もルート66をすべて走っている。俺も小学生のときに父と、テキサスからロサンゼルスまで旅したことがある。

一人で走ろうと思った。一日ドライブして、どこかの小さな村に泊まって、ダイナーに入って、化粧が濃すぎて金髪すぎるウェイトレスと話しながら、ハンバーガーを食べ、まずくて薄いコーヒーを飲みたかった。その後はバーでジューク・ボックスに金を入れ、ビールを飲みながら音楽を聴いて、そこにローカルのアメリカ人と話をして、男の一人旅を味わおうと思った。

そんな空想を巡らせていたある日、5歳になる息子、ブルーがこう言った。

「一緒に行く」

理由はただ一つ、「僕もアメリカ人だから」。思ってもいなかったことだった。プランは全く変わって

も、それはそれでいいかなと思った。だって俺の親父も彼の父と一緒に、シカゴからLAまでルート66を走ってカリフォルニアに引っ越ししてきたからね。50歳の父と5歳の息子、なんかいい旅が始まりそうだ。



LAの空港に着き、レンタカーを借りた。シカゴに入ってそこからルート66でLAまで行くのも良かったけど、そうするとレンタカーが乗り捨てになってすごく高くつく。レンタカーで往復するのが一番安い。

でもLAからシカゴはルート66を使わない。だってル-都66は東から西へ行く道、いつも夕陽に向かって走る道なんだ。もちろん西から東へも行けるけど、馬の毛を逆にブラシするような何かが違う。夢を抱えた人達は、みんな東から西に向かったんだ。

LAからアスファルトのリボンみたいなフリーウェイにのって、地図も持たずにシカゴへ向かった。アメリカの高速はすごいよね、地図を持たずに西海岸からシカゴまで行ける。シカゴまで何マイルと表示してるしね

周りの風景がどんどん変わっても、アスファルトのリボンの上は変わらない。ガソリンを入れる場所も、食べる場所も泊まる場所も、全部高速の脇。そしてどこに行っても高速脇は同じ景色。周りの町や村は何か映画を見ているみたいだ。これも面白かった。

カフェに入っても会話はあまりなくて、やることをやったらもう一度あるファルとのリボンに戻るだけ。だんだん慣れてくると、すぐにアルファルとに戻りたくなる。俺と



ブルーの会話の少なくなる。泊まって食べて、寝て、またアスファルト。彼も車のシートに静かに座って、時速65マイルで過ぎ去っていく風景を見るだけ。

LAを出て一日目の晩。二人でモーターにチェックインしてテレビをついたら、あのピクサーのアニメーション映画「カーズ」をやっていた。ルート66が俺たちを呼んでいたみたいだ。ベッドに横になりながら、二人で見ていた。お母さんがいない初めての晩、大丈夫かと心配したけどブルーはどの話はしなかった。

息子には僕の血が流れているから、アメリカのスピリットに呼ばれているのか。やんちゃ盛りは一緒にいるだけで大変。でも彼は彼なりに何かを感じるんじゃないだろうか。ひと皮剥けて、大きくなるんじゃないだろうか。男だけのいい旅が始まった。

とうもろこし畑の地平線

LAからハイウェイを突っ走ること3日間、明日の昼にはやっとシカゴに着く、そこで小さな平屋のモーテルに泊まることにした。今まで走ってきたのは州と州をつなぐINTERSTATE(インターステイト)といわれる道だ。すごく便利で、カリフォルニアからシカゴまでアメリカみたいな大きな国をほとんど横断するというのに、A4サイズの地図だけでフォローできる。道路の表記はわかりやすいから、誰にも聞かずにカーナビもいらぬ。

でもいろんな町のそばを通ったのに、どこにも寄れなかった。ヨットで海を渡りながらすぐそばに島があっても、風と潮の流れに押されて行けないのと同じ感覚だ。昔からアメリカの歴史によく出てくる町ばかり。行きたいところだらけなのに、行けないのはちょっと寂しい！俺は結構欲求不満。TNERSIATEは、もともと寄り道ができるようにはできていないから仕方がないけれど、でも便利で早く安全、どちらを取るかということだ。

でもすごいね、3日で3000キロぐらい走れるから。南カリフォルニアの砂漠からウタの山からコロラドのハイ・デザートから、ネブラスカの平らな緑の牧場、そして最後にアイオワの巨大なとうもろこし畑。ケビン・コスナー主演の映画『フィールド・オブ・ドリームス』でケヴィンのお父さんの幽霊が尋ねるシーンがある。

「Is this Heaven?」(これは天国なの?)
ケヴィンはこう答える。

「No. this is Iowa」(違う、ここはアイオワだ)

アイオワの景色は、それほど美しい。住む人たちがきっとそう思っているだろう。とうもろこし畑が水平線まで続いて、信じられないほどきれいだよ。でも残念ながら、走ってばかりで写真は撮れなかったけど。

明日からのルート66は違うよね。のんびり、ゆっくり、いろんな町や村を通りながら楽しむつもりだ。



